参考

・「小さい清い流れ」について

環境省水・大気環境局や国土交通省水管理・国土保全局が編集した「川の生きものを調べよう―水生生物による水質判定―」という小冊子がある。その４・５ページに「やまめ」が住む川の環境がイラストで紹介されており、「小さい清い流れ」のイメージがつかみやすいので紹介しておく。

https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/suisituhantei/text.pdf

以下、「城の崎にて」以外の筆者によるテクストから本文理解に有益と思われる部分を補足しておく。

１　山の手線に跳ね飛ばされた事故について

「創作余談」には次のようにある。

「余談になるが、この小説（注「出来事」を指す）を書き上げ、その晩里見弴と芝浦へ涼みに行き、素人相撲を見て帰途、鉄道線路の側を歩いていて、どうした事か私は省線電車に後からはね飛ばされ、甚い怪我をした。東京病院に暫く入院し、危い所を助かった。電車で助かる事を書き上げた日に自分も電車で怪我をし、しかも幸に一生を得た。この偶然を面白く感じた。この怪我の後の気持を書いたのが「城の崎にて」である。それからこの時の経験は「或る男、其姉の死」の中に書き入れてある。」

事故当日の志賀直哉の日記（大正二年八月十五日の記事）においても「創作余談」と同様の事故前後の経緯が書かれている。「城の崎にて」の草稿「いのち」によれば、怪我そのものは背を打ち、頭を石にぶつけて六分ほど切ったようであるが、傷の程度は志賀直哉が「甚い」「一生を得た」と書くほどの重傷ではなく、入院後約二週間しての八月二十七日に退院できたようである。

仮に「城の崎にて」を志賀直哉の実生活と照らし合わせる立場を取るならば、P二〇二・12で登場する「友」は里見弴を指すと考えられる。

２　蜂の死・ねずみ・いもりのことについて

「城の崎にて」で「自分」の心情の変化を捉える契機となる「蜂」「ねずみ」「いもり」だが、志賀直哉の日記を読む限りでは「蜂」「ねずみ」に関しては実際に志賀の目の前で起きた話かどうかは断定しづらい（大正二年十月三十日の記事）。その反対に「いもり」は実際に石を投げたらぶつけて死んでしまったという内容の記述を見て取ることができる（大正二年十月三十一日の記事）。「城の崎にて」本文中においても、「蜂」「ねずみ」の死骸は直視していないのに対して「いもり」の死骸は直視している。学術的な、あるいは生産的な読解かどうかという評価をさておけば、この死骸を直視した／していないという違いの原因を志賀直哉の直接の体験か否かという点に着地させることも可能かもしれない。

３　桑の木の葉が動く原因について

「続々創作余談」によると次のようにある。

「実は風は微かに吹いていたのだが、人体には感じられない程

度の風で、葉はそれで動いていたのだ。そして何故その葉だけが一枚動くかというと、葉柄が真直ぐに風の来る方に向っていて、最初何かで、葉がちょっと動くとあとは振子のように微かな風に吹かれつつ運動が止まらなくなったのである。それが人体にも感じられる風が吹いて来て、かえって運動が止ったという場合で、こういう事は、私は何回か経験しているので、大概分るだろうと思って書いたが、そのため、よく質問を受ける。」。

生徒にとっても理解しづらい場所であると思われる「桑の木の葉」の記述だが、右の引用文を紹介しながら「『城の崎にて』発表当時も質問が多かった場所」「志賀直哉自身は「大概分るだらうと思つて書いた」とあるように、桑の木の葉の動きに関しては特に深い意味を込めて描いたわけではないようだ」などと軽く触れる程度に済ませることも実際の授業上での工夫として考えられる。本指導書の「キー・ポイント桑の木の場面について」でも触れたとおり、本教材では文章の意味それ自体を読み取ることに重点をおいた指導を心がけたい。

なお余談ではあるが、草稿「いのち」では、「風の来る方」だけでなく、桑の木の葉の軸が弱くなっていたことも桑の木の葉が動く原因として挙げている。「城の崎にて」本文にはない記述なので「語句の研究」では書かなかったが、桑の木の葉の軸（つまり葉柄）が枝から外れかけていたことをあわせ考えると、この一連の記述も理解しやすくなるかもしれない。

4　作品全体について

「創作余談」に作者自身が次のように書いている。

『城の崎にて』これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、いもりの死、皆その時数日間に実際目撃した事だった。そしてそれらから受けた感じは素直にかつ正直に書けたつもりである。いわゆる心境小説というものでも余裕から生れた心境ではなかった。」

※心境小説とは

心境小説とは周辺と調和して生きる自己の心境を語る小説のことで、私小説のような戦いと敗北を描かずに、外面的には静かな心境を描いた作品。一般的には「城の崎にて」や「濠端の住まひ」などがあげられる。一方、私小説は作家の実体験に基づき自己の偽らざる姿をリアルに描いた小説。二つとも題材が作家の身辺に限定され、短歌・俳句と共通する点もある日本独特の文学である。志賀直哉のほか太宰治・滝井孝作・尾崎一雄・葛西善蔵などが代表的な作家としてあげられる。